



『GoTo年詞会!』

～新しい時代を創ろう!～

問題提起／厳しい環境下で「磨き続ける3つのこと」

香川同友会 代表理事 林 哲也 氏 (高松第4支部)

香川県ケアマネジメントセンター(株)／代表取締役

はじめに

昨年からのコロナ問題を踏まえて私からは、(1)コロナショックをのりこえる3つの運動、(2)小さな一流企業をめざし磨き続ける3つのこと、について問題提起させていただきます。

問題提起 ①

経営指針を射たものに磨き続けること。経営指針とは、経営理念、10年ビジョン、経営方針、経営計画が一体となったものです。経営指針を会員企業が成文化することで、何のために働き、何を指すのかを明確にすることができ、人生や事業の使命が明らかになり、厳しい中でも頑張れることができます。

経営指針を作成し、磨くことで未来は大きく変わります。皆さんは、「ライスワーク」「ライクワーク」「ライトワーク」この4つのどの山を登るのでしょうか。登る山の目標を間違えば、到着できる山頂は異なります。「ライスワーク」食べるために仕事をしてい

るレベルではありませんか。経営理念、経営指針を磨くことで地域に役立つ光を放ち、誇れるような「ライトワーク」の会社に磨き上げる道筋を目指してもらいたいと思います。

香川同友会に入会后、2年以内に経営理念を成文化し、経営理念を地域に真顔で発信できる経営者になろうと呼びかけています。例えば、昨年末から高松第4支部では、経営理念を語り合う「みらい塾」を開催し、経営理念の成文化の運動に取り組んでいます。

厳しいコロナ禍だからこそ、何のために経営をしているのかと、真剣に問い続けることが危機脱出のための大きな力になるはずです。

問題提起 ②

伸縮無限の可能性を持つ社員の人間性を磨き続けること。まず確認したいことは、規模が何千人、何万人と大きくなければ一流企業ではないと誤解していませんか。そうではありません。昨年、大企業は全国で1万7千人の早期退職を募ったと報道されてい

ます。人を大切にしない。大きいだけではせいぜい3流か、2流にもなれないと言いたいです。

私たちが目指すのは、人を大切にすること。小さな一流企業です。その内容は、黒字経営で社員と家族の豊かな生活を実現し、社員と家族の誇りとなる会社です。それはまた、会員企業が経営方針に基づき、小さな成功体験を積み重ね、小さな一流企業になることであり、地域の希望となることです。

このコロナ禍でも、社員と話し合い、活路を見出した事例は各地で生まれています。人を大切にすること。小さな一流企業になるためには、社員を最も信頼できるパートナーとして共に学び合い、成長し合う信頼関係を育てることが大切です。経営者の側から、社員を信頼してこそ信頼関係は始まります。中小企業は社員にとって最後の学校に成り得ると確信しています。

無限の可能性を持っている社員を、人として信頼し、人間性を磨き、経営者として社員と一緒にこのコロナ禍を乗り越えていく。これを提起したいと思います。

問題提起 ③

同友会の地域力を磨き続けること。地域力発揮の実践事例として、東讃支部の「セトウチメーカーズ」の取組みは貴重だと考えています。これまで、下請け業者だった8社が、独自のブランドづくりに挑戦し、共同して商品を販売するウェブサイトも発信すると共に、所品の新しい開発にも取り組んでいます。

東讃支部の江本手袋(株)／江本氏は、都会の電車通勤をする人たちが、吊り皮に触るのが怖いという報道を見て、新しい商品概念のハンドソックスを職

人さんと話し合い、7日間で仕上げ、それまでの百貨店卸を止め、ネット直販事業を立ち上げ、ヒット商品を作ったことは、昨年ですが同友会の中で大きな話題になりました。中小企業は力を合わせればできるという可能性を示しました。まさに、地域の希望となることができるという、東讃支部の事例を香川県全県で展開すれば、香川県は変わると私は確信しています。

香川同友会は現在1600名近い会員数ですが、これは中小企業の数からいえば、10社に1社、全国トップの企業比率で

す。昨年、会員企業を地図に落として驚きました。香川同友会が持つ、支部の「人」のご縁と、「地」のご縁、ご近所のご縁の力を合わせれば地域は変わると表現してくれました。今回のコロナ禍や、災害の防災などを考えると、極めて重要な地域を支える要、インフラと成り得る力を同友会は持っています。

地域に暮らす経営者と社員が、地域を支える役割を果たすために、今こそ、地域でお互いを知りあい、学びあい、助けあうこと。地域での同友会会員の語りあいのある関係を育てることが大事だと思っています。

最後に

経営者は経営危機に遭遇したとき、天は自ら助くる者を助く」の精神で独立自尊の生き方をしなければなりません。そして、厳しいときこそ「キープスマイル」、「同友会から地域に笑顔の輪を広げよう」を合い言葉に、今年のコロナ禍の時期、ポストコロナの香川県を明るくする同友会を創るために、共に力を合わせていこうではありませんか。



林哲也氏

グループ討論

テーマ

自社が小さな一流企業になるために、何をどのように磨きますか

【グループ討論発表】

●第1テーブル

問題提起①について、社員の幸せが何かを考えたとき、経営指針書に立ち返り、社員と考え方を共有することが大切。それによって社員と会社の考え方が共有でき、幸せになれるのではないかと。

問題提起②については、答えを自分で考えない。答えを全部求めるなどの意見が出たが、社員と経営者の関わりを仕事でないところまで深めれば、大事な関係性が築け、よりよく思いが伝われば、社員の育つ環境が考えられ、モチベーションも上るのではないかと。

問題提起③は、地域の捉え方や考え方が人によって違うのが一番の問題で、その地域の人たちにとってどういうあり方が大切であるかが模索できればということになった。

●第5テーブル

まず最初に、コロナ禍での自社の状況について、話し合った。特徴的だったのは、社員と話をする機会が増え、同じ方向に向くことができ、離職者も減ったという話。

社員が働きがいがあり、退職するときに社員も家族もこの会社で本当によかったと思えるような会社を創りたい。お客さまに対しては、お客さまの要望に高いレベルで応じるような会社でありたい。またそれを常日頃から社員と共有する。

飲食業の場合は、サービス業なので人を磨く必要があり、そのために努力しているという話。どんな業種でも最終的に対応するのは人なので、安心・安全だけでなく、人の対応によって心地よさを抱いてもらえるような仕事をしていく。

今後も人を大切に、人を磨いていくこと。コロナ禍でこれからはいろんなことがあるかと思うが、やるべきことをやる会社が強いという結論になった。

●第6テーブル

「小さな一流企業」とは、一人ひとりが自己の実現ができる。働きがいを感じて、自己実現ができる。

地域に対してどんなことができるかについて、距離的に近い地域の企業同士が手を取り合い、イベントを開催するなど、これから就職を考えている若い人たちに香川で頑張っている会社を知ってもらったり、若い人たちに元気を与えられるということで、地域の企



業とコラボして活動すること。

会社をどのように磨くかについては、社員一人ひとりのアウトプットが大事である。社員間でお互いを認め合うこと。そして、社員の成功体験を積み上げていくことで、一人ひとりのモチベーションを高め、磨かれる会社になっていく。

●第15テーブル

いかに自社を磨くかについては、社員生活等の安定化。そして、地域の発展、地域貢献ができる企業になることが条件になってくる。

とくに、社員が輝き、会社が輝けば、地域が輝く。そういう一連の流れが重要になってくる。社員教育のプログラムが自社の中できちんと創られているかどうか。それが自社が輝くための重要なツールになるのではないかと。

それから、各町にできている振興条例を中心に企業が一つにまとまり、まちづくりに貢献していく。そのような集まりが、一流企業になっていく上で非常に大事になってくるのではないかと。

また、若者の意見を大事にしていくことも重要で、小中学校や高校、大学等の次世代の若者の意見を地域課題の解決のために巻き込んでいくことも大事。巻き込み方をいかに磨くか、その仕組みづくりを企業の中で創っていくことが重要な課題になってくる。

●第20テーブル

最初に、具体的に一流企業とは。またどんな一流企業になりたいですかについて意見交換を。売上や人数ではなく、人の記憶や歴史に残るような企業になりたい。関わる人、社員やお客様全員が満足している企業になりたい。地域の人を支えることができるような企業に。社員も会社も成長できるような企業にという話になった。

「セトウチメーカーズ」の立ち上げの経緯について話をきくことができた。立ち上げについて、東讃支部では会員同士が日頃からそれぞれの企業の抱える課題について話し合いをしており、問題解決をした結果、「セトウチメーカーズ」が誕生したとか。

一流企業をめざすためには、目標や目的を仲間と語り合い、深掘りをして目の前の課題をまず解決すること。そして地域の行政や企業が連携し、時代に合わせ、新しい人の話を聞き、新しいことに取り組んでいくことが大事ということになった。